

実践研究

高校生における日常生活意識及び運動意識と「生きる力」の関連性 — 全日制課程・定時制課程の比較より —

林 園子

The Relationship between High School Students' Daily Life, Awareness of Physical Activity, and "Zest for Life": Comparison of Full-Time and Part-Time high schools

Sonoko HAYASHI

Abstract

The purpose of this study was to investigate what kind of "Zest for living" high school students were able to acquire after completing the study of the old course of study. It examines their perception of daily life, exercise and physical education classes in full-time and part-time classes. Awareness of daily life: In the full-time course, no correlation was found between "Zest for Living" and the enjoyment of school life, suggesting that the enjoyment of school life does not directly relate to the acquisition of "Zest for Living." For part-time students, life outside of school was positively correlated with all subscales of "Zest for Living " while school life was negatively correlated with all subscales. For part-time students, interaction with the outside world is an important element for acquiring "Zest for Living." For future development, it can be said that there is a need to devise ways to enable "interaction with the outside world" through collaboration with the local community, companies, etc. Exercise and Sports: In the full-time course, more than half of the students answered affirmatively for all items in the subscale "Daily Life Conduct Power," suggesting that basic lifestyle habits were acquired. Furthermore, a positive correlation was observed between this ability and exercise and sports, suggesting that increased awareness of exercise and sports contributes to the acquisition of "Daily Life Conduct Power," a skill necessary for acquiring regular lifestyle habits. However, the fact that third-year students rated this ability lower than other years raises concerns that students may develop poor lifestyle habits after graduation. For future development, schools need to provide an environment that provides opportunities to increase awareness of exercise and sports regardless of school year. Physical Education Classes : The full-time course was positively associated with all subscales of "Zest for Life." It was also suggested that, except for the subscale "Proactive Conduct Power," full-time courses were easier to acquire than part-time courses. In particular, the subscale "Situation Grasping Power" was more easily acquired as students advanced through the years. The part-time course was positively associated with the subscales "Adjustment Ability" and "Sports Utilization Power." To do so, develop students in the future, it is necessary to devise lesson content that allows students who like exercise to think about what they can do outside of the sports they play, as well as students who cannot play sports due to health reasons or past traumatic experiences.

キーワード (Key words) : Zest for Living (生きる力), School Life (学校生活), Life outside of School (学校外生活), Exercise and Sports (運動・スポーツ), Physical Education Classes (体育授業), Full-Time Course (全日制課程), Part-Time Course (定時制課程)

I. 問題と目的

現代の若者（とくに中高生）における自己認識の低さ（無気力、学習意欲のなさ、自己肯定感の低さ、人間関係の希薄さ、将来への希望のなさなど）が指摘されて久しい¹⁾。この理由に、日本社会の目まぐるしい経済発展や産業的環境の変化に対して、とくに著しい発育発達時期である彼らの身体面では早熟傾向、精神面・社会面では身体面より発達遅滞傾向であることから、アンバランスな心身状況であることが挙げられる。このような若者の実態を受け、1996年に中央教育審議会²⁾は、変化の激しく先行き不透明な厳しい時代に対する教育の在り方を見直し、「生きる力」を学習指導要領の基本理念として掲げ、育成していく方針を打ち出した。この力の獲得は、児童生徒の自己認識の向上や将来に向けた生活を営む手立てにつながるとしている。学習指導要領の基本理念として約四半世紀を経過した「生きる力」は、変化の激しいこれからの社会を生きていくために必要な資質・能力として当初の概念に変わりはなく、時代とともに変わりゆく日本の社会現状に合わせながら、児童生徒に必要な資質・能力に精査されて示されている。そして、現行学習指導要領(高校は2018年告示)においても育成を継続し、各学校現場では校種や通学スタイルを問わず学校教育全体で取り組むこととなる。

一般的に、生徒にとって学校生活の時間は日常生活の大部分を占めており、学校生活の場から色々な学び(学校教育)を通して自己認識を高めることができる。高校生の学校生活の適応と自己認識の関係性について、先行研究では自己肯定感³⁾、無気力⁴⁾、教師・友人関係や学習関係⁵⁾などの自己認識の向上に学校生活の充実が重要であることを指摘している。しかし、定時制課程に通う生徒にとっての学校生活は日常生活の一部にしか過ぎず、学校外の生活時間が日常生活の主となる。そのため、定時制課程の生徒における自己認識の向上は、学校だけでなく学校外の生活の充実も関与する⁶⁾。ゆえに、学校教育以外の部分で自己認識の向上が期待できることが伺える。

また、学校教育のひとつである教育課程において、体育は、全科目の中で唯一「生きる力」3要素の「確かな学力」「豊かな人間性」「健やかな体」を満遍なく育成できる科目である。体育授業において、林(2013)⁷⁾が高校生を対象とした研究によると、体育授業の肯定的認知(好き・楽しい)は、運動・スポーツへの価値

(自分にとって運動・スポーツは必要である、できる方が良い、楽しい、日常生活に役立つ、自分の運動能力を高めたい)、日常生活(学校や学校外の生活)の充実、自己認識の向上に関与すると述べている。とくに、運動・スポーツへの価値を高めることは「生きる力」の3要素のひとつである「健やかな体」の育成に寄与する⁶⁾。「生きる力」を養う体育授業を展開するためにも、体育授業の肯定的認知は大きく影響しており、「生きる力」の育成条件に、中須賀ら(2018)⁸⁾は、中学校において主にクラスやチームの雰囲気と、自分で自分に合った運動課題の適切な設定ができる授業であること、林(2017)⁹⁾は、高校において仲間・教師の助言を自分に生かす姿勢を身に付けることのできる授業、技能向上のために目標や練習方法を追究し、行動できる授業、生徒の可能な範囲で全力を尽くして取り組むことができる授業であることと、概ね校種問わず類似している条件内容を挙げている。そして、これらの条件は、体育授業の肯定的認知にもつながるとしている⁹⁾。

旧学習指導要領(高校は2009年告示)における「生きる力」の考え方は2006年12月に改正した教育基本法教育理念を踏まえた「知識基盤社会に対応できる力」のことであった。そのため、他者や社会の中で切磋琢磨するための幅広い知識やアイディアの豊富さと、それらの知識を使うための柔軟な思考力を兼ね備えるとともに、自己と対話をしながら自分自身を深めることが求められていた¹⁰⁾。具体的には、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等のバランスの重視¹¹⁾を挙げており、各学校では「各教科においてどのような内容を教えるのか(学ばせるのか)」を中心とした学習展開の取組みが重視された。その取組みの結果、文部科学省¹²⁾は「何が分かったのか」が重視され「何ができるようになったのか」という学びを日常生活や社会生活で活用するための力(実践力)を身に付けさせることが不十分であったことを反省点として挙げている。これは、学校教育全体の反省点ではあるが、実際に旧学習指導要領の「生きる力」の育成から、具体的にどのような日常生活や社会生活で活用するための力(実践力)を身に付けさせることができたのか(あるいは、できなかったのか)明らかになっていない。高等学校では、2022年度より現行学習指導要領が年次遂行で実施され、2024年度(本年度)は、全日制課程や定時制(3年制の場合)の全年次において現行学習指導要領で教育課程を進める初年度となる。

そこで本研究では、旧学習指導要領で示されていた「生きる力」は、旧学習指導要領の学びを終えた彼ら（全日制課程及び定時制課程の生徒）にとって、概ねどのような力を身に付けることができたのかを日常生活、運動・スポーツ、体育授業との関連から検討することを目的とした。

II. 方法

II.-1：調査概要

本研究は、首都圏に所在する高等学校全日制課程（以下、全日制という）4校及び3年制の定時制課程（以下、定時制という）3校の1～3年生712名を対象に質問紙調査を実施した。調査期間は2023年10～12月に行った。

II.-2：質問項目

主な構成は、基本的特性（教育課程、ジェンダー、年代）、日常生活意識（学校生活、学校外生活）、運動意識（運動・スポーツ、体育授業）、生きる力尺度（高校生版）の3項目である。項目の選定は、高等学校現職教員2名、教科教育（保健体育）科目担当の大学教員2名で行った。また、全日制1校及び定時制1校にプレ調査を行ない、その回答より質問項目の改善を行なった。

II.-2-1：基本的特性

教育課程、ジェンダー、年次は選択式で尋ねた。ジェンダーと記した理由は、文部科学省が性的マイノリティの施策の充実へ取り組みを強化していたり、内閣男女共同参画局¹³⁾が「性別情報を取得する際には、性別欄が存在することでハラスメントや差別に通じる困難に直面する人たちの存在を理解し、配慮することも必要」と示していたりするためである。

II.-2-2：日常生活意識及び運動意識

日常生活意識及び運動意識は2件法（はい・いいえ）で尋ねた。運動意識の質問項目は、スポーツ庁が実施する令和5（2023）年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査¹⁴⁾の生徒調査票の一部（18設問中、運動・スポーツは4項目、体育授業は4項目）を使用した。この調査は2008年より毎年行われている国公私立の小学校5年生及び中学校2年生を対象とした悉皆調査である。高校生の場合、毎年、同庁が実施する体力・運動能力調査（6～79歳を対象）を行っており、文部科学省（スポーツ庁）が各学校に直接依頼を行い、承諾を得た学校から対象校を選定して、その対象校が

結果を報告している。その調査においても調査票があり、運動・スポーツにおける実施状況、実施時間、スポーツ所属の有無、食事・睡眠等、生徒調査票項目と類似する設問が示されている。しかし、設問に体育授業にまつわる項目がないため、全国体力・運動能力・運動習慣等調査の生徒調査票項目を使用した。

II.-2-3：「生きる力」（高校生版）尺度

この尺度は、林（2020）⁶⁾が勤労学生や社会人になることに対して現実味を帯びている夜間定時制生徒を対象に、旧学習指導要領に基づく「生きる力」を測るために作成したものである。下位尺度は、人や環境の価値をみいだすときに必要となる「情報把握力」、人に対する自己の意思決定・行動選択のときに必要となる「主体的行動力」、日常生活の調和を図るための基本的生活習慣とそれに付随する他者と関わるときに必要となる「日常生活行動力」、日常生活を円滑に活動するために、これまでに培った知識や経験を普遍的に理論立てて物事をとらえるときに必要となる「調整力」、日本のスポーツ振興のためのキーワード「する・みる・ささえる」から運動・スポーツに関わるときに必要となる「スポーツ活用力」の5つからなる。先行研究において教育課程（全日制・定時制・通信制）を問わず一般高校生を対象とする学習指導要領に基づいた「生きる力」を測る尺度は開発されていない。そこで、この尺度の下位尺度22項目をプレ調査において全日制生徒に質問し、因子構造を確認した結果、林が作成した「生きる力」尺度と同様の因子構造がみられたことから、本研究ではこの尺度を「生きる力」尺度（高校生版）として使用した。「生きる力」尺度（高校生版）22項目を5件法（5：よくあてはまる～1：全くあてはまらない）で尋ねた。

II.-3：分析方法

回収したデータから分析を3段階によって行った。

第1に、日常生活及び運動意識、「生きる力」（高校生版）状況を教育課程（全日制・定時制）の比較検討を行うために χ^2 検定を行った。

第2に、日常生活意識や運動意識が「生きる力」に影響を及ぼす程度を検討するために、「生きる力」（高校生版）下位尺度得点を従属変数（目的変数）、日常生活意識（学校生活、学校外生活）、運動意識（運動・スポーツ、体育授業）のそれぞれの意識を独立変数（説明変数）として強制投入法による重回帰分析を行った。

第3に、「生きる力」の教育課程差及び年次差を調

べるために、「生きる力」(高校生版) 下位尺度得点を従属変数(目的変数), 教育課程及び年次を独立変数(説明変数)として二元配置分散分析を行った。

II.-4: 倫理的配慮

調査の実施に関する倫理的配慮は, 次の3つを行った。

はじめに, 各学校の校長宛に文書にて研究趣旨と個人情報保護について説明した。次に, 調査校の研究協力者(クラス担任)や生徒に対して, 調査協力は任意であり, 回答途中であってもいつでも中止することが可能であることや, 協力の有無により不利益が生じないこと, 質問票の回答への無記名による匿名性の保護について口頭や質問票内の文書にて説明を行った。最後に, 結果や研究全体の成果の説明は, 調査対象校及び個人の希望に応じて開示することや, 質問がある場合には随時対応することとした。なお, 本研究に関わる調査は国際武道大学研究倫理部会の承認を得て実施した(22008号)。

III. 結 果

III.-1: 調査対象者の特性

III.-1-1: 基本的特性, 日常生活意識及び運動意識

全日制及び定時制1～3年生712名から回答を得た。そのうち有効回答数は欠測データを除外した694名(97.5%)であった。対象者の基本的特性を表1に示した。

表1 基本的特性 (n=694)

	教育課程			ジェンダー			年次	
	n	%		n	%		n	%
全日制	425	61.2	男子	451	65.0	1年次	146	21.0
定時制	269	38.8	女子	235	33.8	2年次	233	33.6
合計	694	100.0	無回答	8	1.2	3年次	315	45.4
			合計	694	100.0	合計	694	100.0

表2は, 日常生活意識2項目, 運動意識8項目(運動・スポーツ4項目と体育授業4項目)を教育課程間(以下, 課程間という)で比較したものである。

日常生活意識について, 全体で「学校生活は楽しい: はい」51.7% (n=359), 「学校外の生活は楽しい: はい」62.5% (n = 434) より, 学校外の生活に充実感を得る者が多い状況であった。課程間の差は, 学校及び学校外の生活共にみられなかった。

運動意識について, 運動・スポーツは, 「はい」が全体の過半数以上の項目は「することが好き」67.7%

(n=470)の1項目であった。課程間では, 全日制が「はい(好き)」79.5% (n=338), 定時制「いいえ(嫌い)」50.9% (n=137)と差がみられた(有意確率0.1%水準)。

一方, 「いいえ」が全体の過半数以上の項目は残り3項目であった。一つ目の「運動部・地域スポーツクラブ等へ所属している(以下, 運動部等への所属という): いいえ」は全体で61.0% (n=423)であり, 課程間で, 全日制は55.3% (n=235), 定時制は69.8% (n=188)と定時制の無所属が多い状況であった(有意確率0.1%水準)。二つ目の「あなたにとって運動・スポーツは大切なものである(以下, 体を動かすことの大切さという): いいえ」は全体で67.1% (n=466)であり, 課程間に差はみられなかった。三つ目の「卒業後も, 自主的に運動・スポーツをする時間をもちたいと思う(以下, 今後の運動実施時間の確保という): いいえ」は全体で60.1% (n=417)であった。課程間で, 全日制は「いいえ」69.6% (n=296), 定時制は「はい」55.0% (n=148)と差がみられた(有意確率0.1%水準)。

次に, 体育授業は, 「はい」が全体の過半数以上の項目は3項目あった。一つ目の「体育の授業が楽しい: はい」は66.4% (n=461)及び二つ目の「自ら進んで参加している(以下, 積極的参加という): はい」は67.7% (n=470)であった。課程間では, 全日制が両項目ともに8割近くが「はい」と回答しているが, 定時制が「はい」と「いいえ」がほぼ半数ずつおり, 生徒間で意識が二極化していた(有意確率0.1%水準)。三つ目の「友達と助け合ったり, 教え合ったりすることできたり, わかたりする(以下, 友達との助け合い・教え合いという): はい」は53.5% (n=371)であった。課程間では, 全日制が「はい」56.5% (n=240), 定時制が「いいえ」51.3% (n=138)と差がみられた(有意確率5.0%水準)。

一方, 「いいえ」が全体の過半数以上の項目は「目標を意識して学習することのできる・わかる(以下, 目標意識という): いいえ」68.3% (n=474)であり, 課程間で, 全日制は61.6% (n=262), 定時制は78.8% (n=212)と定時制の方が多い状況であった(有意確率0.1%水準)。

III.-1-2: 「生きる力」(高校生版) 状況

表3は, 「生きる力」(高校生版) 22項目について, 5件法回答の平均得点(5: よくあてはまる～1: 全くあてはまらない)と回答間の人数割合を算出したものである。平均得点のうち3.50点以上を「高意識項目」, 2.99点以下を「低意識項目」と解釈した。

表2 日常生活及び運動意識 (n=694)

日常生活意識

学校		全日制	定時制	全体	DF	P	学校外		全日制	定時制	全体	DF	P
		% (n)	% (n)	% (n)					% (n)	% (n)	% (n)		
学校生活は 楽しい	はい	53.9 (229)	48.0 (130)	51.7 (359)	1	2.36 ns	学校外の生活は 楽しい	はい	64.0 (272)	60.2 (162)	62.5 (434)	1	1.00 ns
	いいえ	46.1 (196)	52.0 (139)	48.3 (335)				いいえ	36.0 (153)	39.8 (107)	37.5 (260)		

運動意識

運動・スポーツ		全日制	定時制	全体	DF	P	体育授業		全日制	定時制	全体	DF	P
		% (n)	% (n)	% (n)					% (n)	% (n)	% (n)		
運動・スポーツを することが好き	はい	79.5 (338)	49.1 (132)	67.7 (470)	1	69.91 ***	体育の授業が 楽しい	はい	75.5 (321)	52.0 (140)	66.4 (461)	1	40.73 ***
	いいえ	20.5 (87)	50.9 (137)	32.3 (224)				いいえ	24.5 (104)	48.0 (129)	33.6 (233)		
運動部・地域 スポーツクラブ等へ 所属している	はい	44.7 (190)	30.2 (81)	39.0 (271)	1	39.72 ***	体育の授業は、 自ら進んで 参加している	はい	78.8 (335)	50.2 (135)	67.7 (470)	1	61.81 ***
	いいえ	55.3 (235)	69.8 (188)	61.0 (423)				いいえ	21.2 (90)	49.8 (134)	32.3 (224)		
あなたにとって、運動 (体を動かす遊びを含む)や スポーツは 大切なものである	はい	34.8 (148)	29.7 (80)	32.9 (228)	1	1.93 ns	保健体育の授業で、 目標(わらい・めあて)を 意識して学習することで、 「できたり、わかったり」する	はい	38.4 (163)	21.2 (57)	31.7 (220)	1	22.42 ***
	いいえ	65.2 (277)	70.3 (189)	67.1 (466)				いいえ	61.6 (262)	78.8 (212)	68.3 (474)		
卒業後も、 自主的に運動 (体を動かす遊びを含む)や スポーツをする時間を もちたいと思う	はい	30.4 (129)	55.0 (148)	39.9 (277)	1	42.04 ***	保健体育の授業で、 友達と助け合ったり、 教え合ったりすることで 「できたり、わかったり」する	はい	56.5 (240)	48.7 (131)	53.5 (371)	1	4.01 *
	いいえ	69.6 (296)	45.0 (121)	60.1 (417)				いいえ	43.5 (185)	51.3 (138)	46.5 (323)		

***P<.001 *P<.05

全体について、全日制は、22項目全てにおいて肯定的回答が否定的回答より人数が多い状況であった。定時制は、否定的回答が肯定的回答より人数が多い項目は10項目(項目No.20,7,11,1,4,2,13,9,6,14)、同数項目は1項目(項目No.3)あった(有意確率0.1%水準)。

下位尺度ごとにみても、情況把握力(7項目)について、全日制は、高意識項目が5項目(項目No.8,20,17,5,12)あり、低意識項目はなかった。また、肯定的回答が過半数以上の項目は1項目(項目No.12)あった。定時制は、高意識項目が1項目(項目No.5)、低意識項目が3項目(項目No.8,20,7)あった。また、肯定的回答及び否定的回答の人数が過半数以上の項目はなかった。否定的回答が肯定的回答の人数を上回る項目は2項目(項目No.20,7)であった(有意確率0.1%水準)。

主体的行動力(3項目)について、全日制は、高意識項目は1項目(項目No.19)あり、肯定的回答が過半数以上の項目も同項目であった。一方、低意識項目

はなかった。定時制は、高意識項目はなく、低意識項目は1項目(項目No.19)と全日制的状況と反していた(有意確率0.1%水準)。また、肯定的回答及び否定的回答の人数が過半数以上の項目、及び、否定的回答が肯定的回答の人数を上回る項目はなかった。

日常生活行動力(6項目)について、全日制は、全項目が高意識項目であり、肯定的回答も過半数以上であった。定時制は、高意識項目は1項目(項目No.15)あり、肯定的回答が過半数以上の項目も同項目であった。一方、低意識項目は2項目(項目No.11,1)あり、否定的回答が肯定的回答の人数を上回る項目も同項目であった(有意確率0.1%水準)。

調整力(3項目)について、全日制は、高意識項目は2項目(項目No.2,13)あり、肯定的回答が過半数以上の項目も同項目であった。定時制は、全項目において低意識項目であり、否定的回答が肯定的回答を上回っていた(有意確率0.1%水準)。

スポーツ活用力(3項目)について、全日制は、高

表 3 「生きる力」(高校生版) 状況 (n=694)

下 位 尺 度	生きる力		肯定的回答				否定的回答				P
	項目	教育課程		よくあてはまる		どちらでもない	あまりあてはまらない		全くあてはまらない		
		全 n=425 定 n=269	m	SD	% (n)		% (n)	% (n)			
情 況 把 握 力	8. 自分と合わない人でも その人の良さをみつけることができる	全日制 定時制	<u>4.07</u> <u>2.86</u>	0.86 1.13	11.3 (48) 9.7 (26)	24.7 (105) 21.9 (59)	30.8 (131) 38.7 (104)	19.8 (84) 15.2 (41)	13.4 (57) 14.5 (39)	5.95 DF=4 ns	
	16. ボランティア活動や困っている人への サポートに関心をもつことができる	全日制 定時制	3.46 3.20	1.15 1.21	11.3 (48) 16.0 (43)	38.1 (162) 25.6 (69)	35.6 (151) 38.3 (103)	12.2 (52) 7.8 (21)	2.8 (12) 12.3 (33)	36.53 DF=4 ***	
	20. 自然や夜景などをみて感動したり、 大切にできる	全日制 定時制	<u>4.30</u> <u>2.71</u>	0.83 1.24	5.9 (25) 8.6 (23)	24.7 (105) 11.5 (31)	40.2 (171) 39.4 (106)	23.1 (98) <u>17.5 (47)</u>	6.1 (26) <u>23.0 (62)</u>	56.03 DF=4 ***	
	17. チームワークを 大切にすることができる	全日制 定時制	<u>3.99</u> 3.10	0.96 1.19	18.6 (79) 9.3 (29)	22.1 (94) 19.3 (52)	26.6 (113) 43.2 (116)	22.1 (94) 12.6 (34)	10.6 (45) 15.6 (42)	35.10 DF=4 ***	
	5. 相手の気持ちを考えて、 あいさつやお礼などの受け答えができる	全日制 定時制	<u>4.34</u> <u>3.64</u>	0.49 1.10	10.4 (44) 10.8 (29)	28.5 (121) 19.7 (53)	32.8 (140) 40.1 (108)	20.5 (87) 14.9 (40)	7.8 (33) 14.5 (39)	17.50 DF=4 ***	
	12. 目上の人に協力することができる	全日制 定時制	<u>4.38</u> 3.15	0.51 1.20	<u>18.4 (78)</u> 11.2 (30)	<u>36.9 (157)</u> 23.4 (63)	30.3 (129) 36.4 (98)	10.4 (44) 14.5 (39)	4.0 (17) 14.5 (39)	41.72 DF=4 ***	
	7. まわりの人と分け隔てなく接する ことができる	全日制 定時制	3.39 <u>2.90</u>	1.26 1.29	15.1 (64) 10.0 (27)	34.6 (147) 18.2 (49)	33.9 (144) 39.5 (106)	10.8 (46) <u>14.1 (38)</u>	5.6 (24) <u>18.2 (49)</u>	46.42 DF=4 ***	
	3. 人の意見に流されず 自分で判断することができる	全日制 定時制	3.02 3.07	1.26 1.21	13.8 (59) 18.2 (49)	24.5 (104) 10.0 (27)	24.5 (104) 43.5 (117)	23.8 (101) 16.7 (45)	13.4 (57) 11.5 (31)	43.23 DF=4 ***	
	19. 人の気持ちになって考えたり、 心配りができる	全日制 定時制	<u>3.57</u> <u>2.98</u>	1.06 1.22	<u>20.9 (89)</u> 13.4 (36)	<u>34.6 (147)</u> 16.7 (45)	28.7 (122) 40.1 (108)	12.0 (51) 13.8 (37)	3.8 (16) 1.6 (43)	60.06 DF=4 ***	
	22. 人が嫌がる役目・仕事でも快く引き受ける ことができる	全日制 定時制	3.11 3.43	1.20 1.23	16.2 (69) 27.1 (73)	19.3 (82) 16.7 (45)	32.7 (139) 36.8 (99)	22.6 (96) 11.2 (30)	9.2 (39) 8.2 (22)	23.02 DF=4 ***	
	日 常 生 活 行 動 力	11. 最低一日一回は、家族と一緒に 食事をする事ができる	全日制 定時制	<u>3.92</u> <u>2.80</u>	1.34 1.42	<u>50.1 (213)</u> 17.5 (47)	<u>17.4 (74)</u> 14.1 (38)	15.8 (67) 25.6 (69)	7.5 (32) <u>16.4 (44)</u>	9.2 (39) <u>26.4 (71)</u>	98.71 DF=4 ***
		10. 毎日、楽しく食事をしている	全日制 定時制	<u>4.33</u> 3.36	0.23 1.20	<u>56.9 (242)</u> 20.1 (54)	<u>25.4 (108)</u> 26 (70)	12.5 (53) 34.9 (94)	4.5 (19) 8.2 (22)	0.7 (3) 10.8 (29)	131.90 DF=4 ***
15. 家族や友人・仲間を大切に して仲良くすることができる		全日制 定時制	<u>4.48</u> <u>3.62</u>	0.47 1.19	<u>61.6 (262)</u> <u>27.5 (74)</u>	<u>27.6 (117)</u> <u>30.8 (83)</u>	8.9 (38) 25.7 (69)	1.4 (6) 8.6 (23)	0.5 (2) 7.4 (20)	115.41 DF=4 ***	
21. 家族や友人・仲間と色々な話を して分かち合うことができる		全日制 定時制	<u>4.27</u> 3.43	0.82 1.26	<u>46.8 (199)</u> 24.9 (67)	<u>35.8 (152)</u> 24.5 (66)	15 (64) 30.5 (82)	1.9 (8) 8.9 (24)	0.5 (2) 11.2 (30)	104.36 DF=4 ***	
1. 毎日、きちんと朝食をとること ができる		全日制 定時制	<u>3.61</u> <u>2.87</u>	1.49 1.38	<u>41.9 (178)</u> 17.5 (47)	<u>19.8 (84)</u> 14.9 (40)	9.8 (42) 26.7 (72)	14.6 (6) <u>19.0 (51)</u>	13.9 (59) <u>21.9 (69)</u>	69.28 DF=4 ***	
18. 起床時間・就寝時間を一定に決 めて守ることができる		全日制 定時制	<u>3.60</u> 3.00	1.31 1.22	<u>31.3 (133)</u> 13.8 (37)	<u>29.9 (127)</u> 17.5 (47)	16.5 (70) 38.2 (103)	12.7 (54) 15.6 (42)	9.6 (41) 14.9 (40)	67.13 DF=4 ***	
4. からだの調子を整えること ができる		全日制 定時制	3.30 <u>2.96</u>	1.12 1.11	16.7 (71) 9.3 (25)	26.8 (114) 20.8 (56)	32 (136) 37.5 (101)	19.1 (81) <u>21.6 (58)</u>	5.4 (23) <u>10.8 (29)</u>	17.31 DF=4 ***	
2. 物事に筋道を立てて考える ことができる		全日制 定時制	<u>3.69</u> <u>2.87</u>	1.11 1.16	<u>26.4 (112)</u> 8.2 (22)	<u>36.2 (154)</u> 20.1 (54)	23.6 (100) 38.6 (104)	8.2 (35) <u>16.7 (45)</u>	5.6 (24) <u>16.4 (44)</u>	84.96 DF=4 ***	
13. 常に自分の感情をコントロール することができる	全日制 定時制	<u>3.83</u> <u>2.93</u>	1.07 1.18	<u>31.3 (133)</u> 14.5(39)	<u>35.1 (149)</u> 11.2 (30)	22.8 (97) 39 (105)	6.8 (29) <u>23.4 (63)</u>	4.0 (17) <u>11.9 (32)</u>	118.90 DF=4 ***		
ス ポ ー ツ 活 用 力	9. 家族や友人・仲間と運動・スポ ーツの話をよくする	全日制 定時制	<u>3.82</u> <u>2.41</u>	1.08 1.34	<u>41.6 (177)</u> 8.9 (24)	<u>23.5 (100)</u> 13.0 (35)	16.7 (71) 25.7 (69)	11.1 (47) <u>15.2 (41)</u>	7.1 (30) <u>37.2 (100)</u>	158.85 DF=4 ***	
	6. テレビ・試合会場でスポーツを 観たり、応援したりする	全日制 定時制	<u>3.78</u> <u>2.65</u>	1.11 1.36	<u>39.8 (169)</u> 12.3 (33)	<u>26.1 (111)</u> 14.9 (40)	15.1 (64) 27.4 (74)	10.1 (43) <u>16.0 (43)</u>	8.9 (38) <u>29.4 (79)</u>	110.56 DF=4 ***	
	14. 運動・スポーツを学校以外で よくする	全日制 定時制	3.09 <u>2.60</u>	1.44 1.34	23.2 (99) 8.2 (22)	19.3 (82) 22.3 (60)	20.1 (85) 20.8 (56)	18.1 (77) <u>18.6 (50)</u>	19.3 (82) <u>30.1 (81)</u>	39.60 DF=4 ***	

意識項目が2項目（項目 No.9,6）あり、肯定的回答が過半数以上の項目も同項目であった。定時制は、全項目において低意識項目であり、否定的回答が肯定的回答を上回っていた（有意確率 0.1%水準）。

Ⅲ.-2：「生きる力」と日常生活意識及び運動意識

表4において、「生きる力」（高校生版）の5つの下位尺度間における Pearson の積率相関係数を算出した。得られた相関係数は $r=.416 \sim .860$ の範囲で全ての下位尺度間において有意な正の相関がみられ、相互に関係性があることが認められた。

表4 「生きる力（高校生版）下位尺度間の相関関係

状況把握力	主体的行動力	日常生活行動力	調整力	スポーツ活用力	全体
状況把握力	—	.523***	.603***	.586***	.860***
主体的行動力	—	.559***	.457***	.416***	.602***
日常生活行動力	—	.483***	.517***	.834***	
調整力	—	.477***	.737***		
スポーツ活用力	—	.731***			
全体	—				

*** $p<.001$ Pearson相関

下位尺度間において相互に関係性が認められたことから、「生きる力」（高校生版）下位尺度（従属変数）と日常生活意識（学校・学校外）、運動意識（運動・スポーツ、体育授業）の各意識（独立変数）との関連を検討するために、対象者の各意識を「生きる力」の要因として重回帰分析を行った。独立変数の大きさや単位に左右されことなく相対的な係数の大きさを調べることができる標準化偏回帰係数（ β ）は従属変数に与える影響を比較することも可能であるため、この係数を用いて比較した。なお、日常生活意識は、先述した先行研究より課程間において学校及び学校外の生活にそれぞれ特徴がみられていることから個々に、運動意識は、運動・スポーツ（4項目）及び体育授業（4項目）の各項目の合計得点を求め、それらに下位尺度を全て投入する強制投入法を採用した。

下位尺度「状況把握力」（図1、表5）及び「主体的行動力」（図2、表6）において、全日制は「体育授業」、定時制は「学校外生活」と正の関連がみられた。さらに、定時制は「学校生活」と負の関連がみられた。

下位尺度「日常生活行動力」（図3、表7）において、「状況把握力」「主体的行動力」の結果に加え、全日制は「運動・スポーツ」と正の関連がみられた。

下位尺度「調整力」（図4、表8）において、「状況把握力」「主体的行動力」の結果に加え、全日制は「学

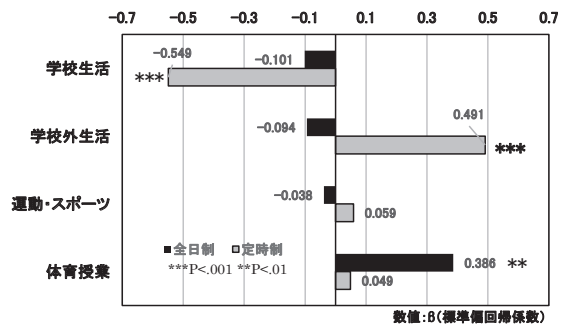


図1 下位尺度「状況把握力」と日常生活及び運動意識(β 比較)

表5 下位尺度「状況把握力」と日常生活及び運動意識

下位尺度	状況把握力					
	B		SE B		β	
意識	全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制
学校生活	-.192	-.653	.126	.125	-.101	-.549***
学校外生活	-.104	1.527	.053	.297	-.094	.491***
運動・スポーツ	-.026	.078	.034	.074	-.038	.059
体育授業	.403	.070	.176	.080	.386**	.049
R ²	全日制 .293***		定時制 .396***			

B: 偏回帰係数 SE B: 標準誤差 β : 標準偏回帰係数 *** $p<.001$ ** $p<.01$

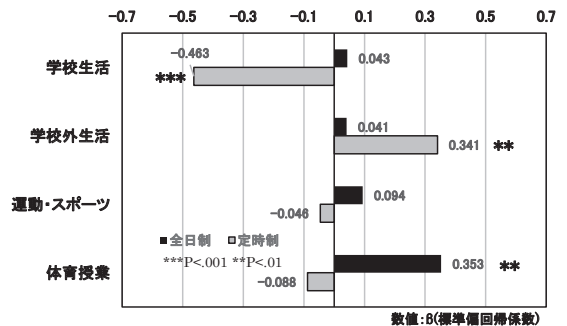


図2 下位尺度「主体的行動力」と日常生活及び運動意識(β 比較)

表6 下位尺度「主体的行動力」と日常生活及び運動意識

下位尺度	主体的行動力					
	B		SE B		β	
意識	全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制
学校生活	.045	-.462	.066	.166	.043	-.463***
学校外生活	.043	.357	.069	.135	.041	.341**
運動・スポーツ	.054	-.030	.032	.039	.094	-.046
体育授業	.387	-.060	.126	.043	.353**	-.088
R ²	全日制 .276***		定時制 .328***			

B: 偏回帰係数 SE B: 標準誤差 β : 標準偏回帰係数 *** $p<.001$ ** $p<.01$

校外生活」と負の関連、定時制は「体育授業」と正の関連がみられた。

下位尺度「スポーツ活用力」（図5、表9）において、「状況把握力」「主体的行動力」の結果に加え、定時制

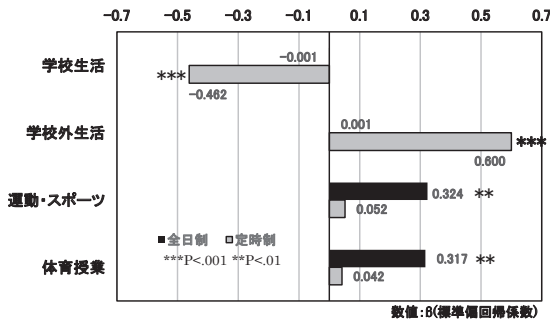


図3 下位尺度「日常生活行動力」と日常生活及び運動意識(β比較)

表7 下位尺度「日常生活行動力」と日常生活及び運動意識

下位尺度	日常生活行動力					
	B		SE B		β	
	全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制
意識						
学校生活	-.001	-.638	.119	.153	-.001	-.462***
学校外生活	.001	1.593	.116	.300	.001	.600***
運動・スポーツ	.336	.068	.157	.073	.324**	.052
体育授業	.442	.059	.150	.079	.317**	.042
R ²	全日制 .392***				定時制 .339***	

B: 偏回帰係数 SE B: 標準誤差 β: 標準偏回帰係数 ***P<.001 **P<.01

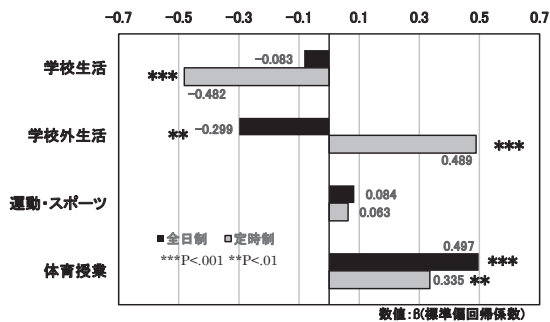


図4 下位尺度「調整力」と日常生活及び運動意識(β比較)

表8 下位尺度「調整力」と日常生活及び運動意識

下位尺度	調整力					
	B		SE B		β	
	全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制
意識						
学校生活	-.098	-.554	.079	.173	-.083	-.482***
学校外生活	.243	1.348	.177	.331	-.299**	.489***
運動・スポーツ	.057	.049	.038	.044	.084	.063
体育授業	.415	.364	.161	.147	.497***	.335**
R ²	全日制 .376***				定時制 .472***	

B: 偏回帰係数 SE B: 標準誤差 β: 標準偏回帰係数 ***P<.001 **P<.01

は「体育授業」と正の関連がみられた。

課程間ごとにまとめると、全日制は、全下位尺度において「体育授業」と、下位尺度「日常生活行動力」において「運動・スポーツ」と正の関連、下位尺度「調

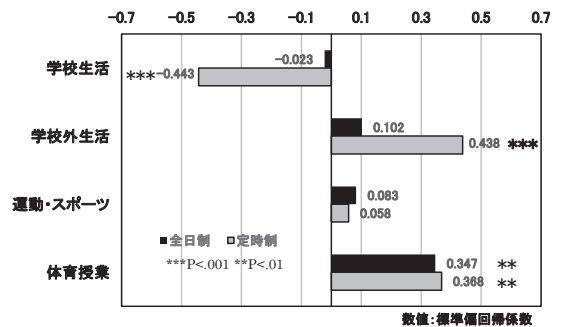


図5 下位尺度「スポーツ活用力」と日常生活及び運動意識(β比較)

表9 下位尺度「スポーツ活用力」と日常生活及び運動意識

下位尺度	スポーツ活用力					
	B		SE B		β	
	全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制
意識						
学校生活	-.026	-.466	.076	.151	-.023	-.443***
学校外生活	.157	.462	.094	.157	.102	.438***
運動・スポーツ	.054	.057	.037	.058	.083	.058
体育授業	-.364	.383	.122	.154	.347**	.368**
R ²	全日制 .272***				定時制 .472***	

B: 偏回帰係数 SE B: 標準誤差 β: 標準偏回帰係数 ***P<.001 **P<.01

整力」は「学校外生活」と負の関連がみられた。定時制は、全下位尺度において「学校生活」と負の関連、「学校外生活」と正の関連がみられた。また、下位尺度「調整力」及び「スポーツ活用力」は「体育授業」と正の関連がみられた。

Ⅲ.-3: 「生きる力」と教育課程及び年次

「生きる力」(高校生版) 尺度の教育課程差及び年次差を調べるために二元配置分散分析を行った。また、多重比較に3群以上の群相互の母平均の有意差を調べる Bonferroni 法を用いた(表10)。

下位尺度「情況把握力」は、教育課程の主効果(F(1,694)=274.25, P<.001, 全日制>定時制)、年次の主効果(F(2,694)=3.49, P<.05, 3年>2年>1年)が認められた。

下位尺度「主体的行動力」は、教育課程及び年次の主効果が認められなかった。

下位尺度「日常生活行動力」は、教育課程の主効果(F(1,694)=308.49, P<.001, 全日制>定時制)、年次の主効果(F(2,694)=12.15, P<.001, 1年>2年>3年)が認められた。さらに交互作用(F(2,694)=3.10, P<.05)が認められたことから単純主効果を行った。その結果、年次ごとの教育課程では1年生において(F(2,694)=39.49, P<.001, 全日制1年>定時制

表 10 「生きる力」と教育課程、年次の関連

n=694		1年次		2年次		3年次		F値			多重比較	
								主効果		交互作用		單純主効果
		全日制	定時制	全日制	定時制	全日制	定時制	教育課程	年次			
情況 把握力	m	26.26	20.38	27.99	22.41	29.51	24.78	274.25***	3.49*	1.65	全>定	
	SD	3.34	4.57	3.85	3.86	3.81	4.56				3年>2年>1年	
主体的 行動力	m	9.95	9.49	9.23	9.51	9.95	9.45	1.87	1.20	2.51		
	SD	1.78	1.94	1.92	2.04	2.05	2.22					
日常生活 行動力											全>定	
											1年>2年>3年	
	m	29.55	21.59	24.87	18.81	19.92	17.25	308.49***	12.15***	3.10*	39.49*** 全1年>定1年	
	SD	3.14	4.66	3.48	3.93	3.44	4.20				29.04*** 全2年>定2年	
											28.61*** 全3年>定3年	
							3.68* 全1,2年>全3年					
調整力	m	10.97	9.01	10.33	8.70	11.14	8.65	106.88***	2.17	2.03	全>定	
	SD	2.24	2.94	2.29	2.43	2.38	2.29					
スポーツ 活用力	m	10.45	7.51	10.37	7.98	11.00	7.52	130.43***	0.51	1.43	全>定	
	SD	2.33	2.74	2.21	3.30	2.26	2.97					
二元配置分散分析		多重比較: Bonferroni法				自由度: 全定(1,694), 年次(2,694)				***P<.001 *P<.05		

1年), 2年生において ($F(2,694)=29.04$, $P<.001$, 全日制2年>定時制2年), 3年生において ($F(2,694)=28.61$, $P<.001$, 全日制3年>定時制3年) から全日制が定時制よりもこの因子が高い傾向が示された。教育課程ごとの年次では, 全日制において ($F(2,694)=3.68$, $P<.05$) から3年生が他年次よりも低い傾向が示された。

下位尺度「調整力」は, 教育課程の主効果 ($F(1,694)=106.88$, $P<.001$, 全日制>定時制) が認められた。

下位尺度「スポーツ活用力」は, 教育課程の主効果 ($F(1,694)=130.43$, $P<.001$, 全日制>定時制) が認められた。

Ⅳ. 考 察

Ⅳ-1: 全日制課程における「生きる力」と日常生活意識及び運動意識の関連

Ⅳ-1-1: 日常生活意識

日常生活意識において, 5～6割の者が学校や学校

外の生活に楽しさを感じていた(表2)。NHK放送文化研究所(2022)¹⁵⁾が中学生(596名)及び高校生(566名)を対象に実施した生活意識調査において「学校が楽しいですか(4件法)」の問いに高校生の87.6%が肯定的(とても楽しい, まあ楽しい)に回答をしていた。また, 「学校で一番楽しいこと」の問いに「友達と話したり一緒に何かしたりすること」が75.4%と最も多い回答であった。大久保(2005)¹⁶⁾は「友人関係は一貫してどの学校でも学校への適応に強い影響をあたえる」と述べていることから, 友人関係の良好さが学校生活の楽しさの有無を決める要因のひとつであるといえる。

「生きる力」と日常生活の関連について, 「生きる力」(高校生版)全下位尺度と学校生活に関連性がみられなかったことから, 学校生活の楽しさの有無が「生きる力」の体得に直接的な関与をすることではないことが示唆された(図1～図5, 表5～表9)。しかし, 下位尺度「調整力」において学校外生活と関連していた

(図4,表8)。この調整力とは、徳永(2012)¹⁷⁾の「自己や他者の情動を理解し、その情動に対して適切な方略(スキル)を用いて調整する力」の意より因子名に起用している。

ところで、こども家庭庁が令和3～4年(2021～2022年)に青少年(小学生4～6年生953名、中学生1259名、高校生1048名、その他19名)を対象に実施したインターネット利用環境実態調査¹⁸⁾によると、高校生の平日のインターネット平均利用時間(パソコン、スマートフォン、インターネットにつなげる音楽機器や家電、ウェアラブル端末など全てを含む)は374分(約6時間)であり、そのうち54.4%が「5時間以上」利用している。また、高校生のスマートフォン所持率は9割を超えており、スマートフォンのみにおける平均のインターネット利用時間は236.5分(約4時間)であり、インターネット平均利用時間のうちスマートフォンを介して利用する時間が約6割を占めている。そして、高校生のスマートフォンにおけるインターネット利用目的は「コミュニケーションのため」であることから、学校外の生活においても、直接顔を合わせている学校の友人のみならずスマートフォンを介して(SNSを通じて)学校内外の友人関係の良好さを保つために多大な時間を割いていることが伺える。本結果より、多くの者が学校外の生活の楽しさを感じていた理由も友人関係の良好さにあると推察する。しかし、SNSの特徴より、見ず知らずの人からのコメントや友達申請、顔が合わないことを理由とした誹謗中傷(言葉の強い書き込み)、金銭関係(商業的勧誘)、個人情報の特定制被害(ストーカー行為)などへの不安や、フォロワー数や「いいね!」の数などの他者評価の可視化による過剰な反応による「SNS疲れ¹⁹⁾」が現代の青年における友人関係のデメリットとして挙げられていることから、生徒の中には学校外の生活に苦痛を感じて過ごす者も多いと推察する。本結果において下位尺度「調整力」項目で「物事に筋道を立てて考えることができる」や「常に自分の感情をコントロールすることができる」において7割近くの者が肯定的回答をしていた(表3)ことや、全日制の方が定時制より身に付けやすい力である(表10)ことから、現時点において仲間や友人と良好なコミュニケーションをとれている様子が伺えるが、学校外生活と負の関連(図4,表8)より、今後、長きにわたるSNSの活用による人間関係のもつれによって「SNS疲れ」が生じ、学校外の生活が苦と感じる者が多くな

れば多くなるほど、この力が身に付きづらくなることが懸念される。したがって、今後の育成に向けて、現時点の状況を楽しむのではなく、これからの人とのよりよいつながりを見据えながら学校外の生活を過ごすことが重要になると考える。

IV-1-2:運動意識

はじめに、運動・スポーツについて「することが好き」と感じている者が多かったが、「運動部等への所属」「体を動かすことの大切さ」「今後の運動実施時間の確保」に対して前向きな者が少ない状況であった(表2)。

国立青少年教育振興機構(2018)²⁰⁾が高校生を対象に実施した心と体の健康に関する意識調査の国際比較(日本1706名、アメリカ1519名、中国3240名、韓国2015名対象)によると、学校や地域の運動クラブへの加入率は4割程度であり、4か国中3位と低い状況であった。また、笹川スポーツ財団(2023)²¹⁾の調査において運動部活動への加入率は2019以降減少傾向にあるとしている。さらに、同調査でスポーツクラブタイプ(学校の運動部活動のみ所属、学校外のスポーツクラブ等のみ所属、両方に所属、無所属の4タイプ)における運動不足感と主観的健康感をみたところ、無所属タイプの運動不足感は、他の所属タイプより高い傾向にあるが、主観的健康感は所属の有無にかかわらず肯定的(とても健康・健康である)な回答をする者が多い状況であった。これより高校生は、運動やスポーツをすることが健康意識を高める手段という考え方ではなく、今の自分が健康であるなら必要以上に自ら運動・スポーツをすることはないという考え方が一般的であることが伺える。

「生きる力」と運動・スポーツの関連について、下位尺度「日常生活行動」と正の関連がみられた(図3,表7)。先行研究において運動習慣のある者は朝食率が高く²²⁾、質の良い睡眠や短時間で効率良く睡眠欲求を満たすことができる²³⁾など生活習慣の乱れが少ないとされている。また、橋本・徳永(2002)²⁴⁾は運動・スポーツの実施頻度が多いほど、健康度が高く、良好な人間関係の保持にも関連性があることを述べている。本結果では、日常生活行動力(6項目)の全項目において過半数以上が肯定的回答であった(表3)ことから基本的な生活習慣が身に付いているように伺える。しかし、年次間において、3年生が他年次よりもこの力の評価が低かった(表10)ことから、体育の授業時数の減少や部活動の引退、受験などによる運動・スポーツへの頻度の減少が想定され、このまま大学生

や社会人になれば、さらに運動・スポーツをすることが少なくなり、運動・スポーツへの意識も低くなるのが懸念される。そして、これから生活習慣の乱れが顕著に表れる可能性もある。したがって、今後の育成に向けて学校現場では、年次に左右されない運動・スポーツへ関わる機会の環境提供や、生徒らが高校卒業後も運動・スポーツの意識を高めて実践していくための個々に応じた指導や配慮が必要であると考ええる。

次に、体育授業について、全体で「楽しさ」「積極的参加」に8割程度が肯定的に感じていた(表2)。澤(2017)²⁵⁾は、運動・スポーツに対する生徒の満足度を規定する主要因は「楽しさ」であることや、林(2013)⁷⁾は、運動・スポーツの楽しさが体育授業の楽しさや積極的参加に寄与すると述べている。さらに、中須賀ら(2018)⁸⁾は、体育授業の動機づけ(やる気)には生徒の積極的参加によって楽しみながら学ぶことが重要であるとしている。

「生きる力」と体育授業の関連より、全下位尺度と正の関連にあった(図1～図5,表5～表9)。そして、教育課程と年次の関連より、下位尺度「主体的行動力」以外、全日制の方が定時制より身に付けやすい力であることが示唆された(表10)。とくに下位尺度「状況把握力」は年次が上がるにつれて着実に身に付いている状況であった。林(2013)⁷⁾は、高校生が体育授業を通して、する・みるスポーツなどの「運動・スポーツとの関わり」、挨拶をする・人を喜ばせる・サポートするなどの「感情」、頼られる・仕切り役を任される・ポジティブ思考などの「リーダーシップ」、穏やかな気持ちでいる・協力する・くよくよしないなどの「心の安定」、熱中・挑戦などの「興味・関心」、約束を守る・最後まであきらめない・集中するなどの「態度・姿勢」を身に付けることが体育授業の肯定的認知や積極的参加、さらには日常生活の充実につながる要素であるとしている。そして、これらの要素は下位尺度「状況把握力」に匹敵する内容が多く含まれていることから、体育授業によって、この力が年々身に付いているのではないかと推察する。以上より、体育授業は、全日制生徒にとって「生きる力」の育成に大きく貢献する場といえる。

一方、全体で「友達との助け合い・教え合い」に対して6割程度が肯定的に、「目標意識」に対して6割程度が否定的に感じていた(表2)。先述した「生きる力」の育成条件(仲間・教師の助言を自分に生かす姿勢を身に付けることのできる授業、技能向上のため

に目標や練習方法を追究し、行動できる授業、生徒の可能な範囲で全力を尽くして取り組むことができる授業)を体育授業で成立するために、中須賀ら(2018)⁸⁾は、努力によって自己の能力を伸ばし、成長させるための環境を示す「熟達雰囲気」や、仲間との共同体験などによる生徒間の相互作用のある環境を示す「協同雰囲気」といった「学習の雰囲気づくり」と、生徒の掲げる目標が他者との競争や比較による優劣や能力の高低ではなく、今自分が持っている知識や技術の向上によって能力を伸ばせるよう「課題的志向となるための目標設定が生徒自身でできる場面」といった「学習環境整備」の必要性を指摘している。体育授業における「生きる力」の育成条件の成立は、体育授業の肯定的認知や積極的参加にもつながるとしているが、本結果より、体育授業への楽しさや積極的参加の多い理由は、中須賀ら述べる「学習の雰囲気づくり」や「課題的志向となるための目標設定が生徒自身でできる場面」といった学習環境のよさによるものではなく、生徒らは自分に合った明確な目標や課題設定の方法や、自己の能力を伸ばすための目標に向けて全力に取り組むための術が分からず、単なる友達と遊びやレクリエーション的感觉で活動していることに楽しさを感じたり参加への積極性がみられたりするのではないかと推察する。

生きる力は、「自分で課題を見つけ、自ら学び²⁾」と定義の冒頭で示されていることから、生徒自身が学習目標や学習課題を設定する力を身に付けることが重要である。そのうえで、実践、反省を繰り返す中で、仲間や友人と関わり合いをもちながら自己評価(自分で立てた目標が達成できているかどうか)を行うことがPDCAサイクルとしての順序である。とくに下位尺度「主体的行動力」は、「生きる力」3要素のひとつである「確かな学力」にある「主体性(自分の意思や判断をもとに自分で目標を決めて行動すること)」の意より因子名としてつけられており、「自分で課題を見つけ、自ら学ぶ」ために必要な力である。「生きる力」との関連について、下位尺度「日常生活行動」と正の関連がみられたが、教育課程と年次の関連(表10)より唯一、教育課程差も年次差もなかったことから、全日制生徒に身に付きづらい力であることが示唆された。したがって、生徒らが自分に合った明確な目標や課題設定の方法や、自己の能力を伸ばすための目標に向けて全力に取り組むための術を見いだすことのできる体育授業がこの力を体得するために寄与すると

考える。今後の育成に向けて、体育授業は、生徒の「主体性」を高めるためにも、仲間との相互作用のある環境のみならず、生徒自身が学習目標や学習課題の設定をする力を身に付けるための学習環境の工夫が必要であると考ええる。

IV.-2: 定時制課程における「生きる力」と 日常生活及び運動意識の関連

IV.-2-1: 日常生活意識

日常生活意識において、全体で学校外生活の方が学校生活より楽しさを感じている者が多い傾向にあった(表2)。また、「生きる力」との関連において、全下位尺度が学校外生活と正の関連、学校生活と負の関連がみられた(図1表5～図5表9)。城所・酒井(2006)²⁶⁾は定時制生徒の日常生活の充実について「外部との関わり」は有益な要素であるとしている。定時制生徒の日常生活において、学校外の生活の場合、全日制の状況とは異なり、年齢、身分、経験、価値観など多様性の高い集団の中で過ごしている。また、学校外の生活も、通常全日制が学校にいる時間帯に仕事(多くはアルバイトやパート)をしている者が多く、仕事場でも多様性の高い集団の中で過ごしている。仕事場では、アルバイトやパートの身分であろうと夕方から働く高校生アルバイトクルーより、大人として扱われている²⁶⁾ことから、仕事先の上司や同僚からの指導や支援を受けながら働くことによって、社会で過ごすための生きた学びや情報を得たり、役割や責任を果たしたりすることで「生きる力」を体得していると推察する。

しかし、学校生活の場合、多様性の高い集団で生活しているものの、皆が「生徒」という同じ立場であることから、仲間同士で教え合ったり、支援をし合ったりすることは稀である。よって、多様性の高い集団の仲間とうまくかわっていくための能力を必要とする。先行研究において、全日制の研究ではあるが、藤原・河村(2019)²⁷⁾は、非進学校(底辺校)の生徒の特徴として、進学校や進路多様校(中堅校)と比較して対人トラブルを抱えやすいことを指摘している。この実態は定時制の場合でも同じことがいえる。また、実際に定時制の中途退学理由にも「学校生活・学業不適応」が最も多い²⁸⁾。そのため、定時制生徒にとって「外部との関わり」すなわち学校外の生活の楽しさ(充実感)は「生きる力」を体得するために重要な要素であるといえる。そのため「外部との関わり」をもたずに1日を過ごしている生徒は、「生きる力」を身に付

ける機会が乏しく、学校生活だけでなく社会生活の不適應になる者も多くなることが懸念される。今後の育成(全下位尺度)に向けて、定時制の学校現場では、地域や企業などの連携による「外部との関わり」ができるような工夫が必要であると考ええる。

IV.-2-2: 運動意識

体育授業において、はじめに、全体において「楽しい」「積極的参加」がやや多い傾向であった(表2)。林(2020)⁶⁾によると定時制生徒は、仕事による時間的制約、健康上の理由、過去のトラウマ等の理由により、運動・スポーツを学校以外で積極的に行う者が極めて少なく、体育授業が唯一、体を動かす場であると述べている。スポーツの役割とは、身体的及び精神的充足や健康の保持増進へ貢献することであることから、定時制の体育授業はその役割を担っているといえる。本結果でも「運動部等への所属」が少ないことから、体育授業が生徒らの体を動かす場として大いに貢献していることが伺える。

次に、「目標意識」「友達との助け合い・教え合い」において、否定的に感じている者が多い傾向(表2)であったこと、「生きる力」状況より、調整力(3項目)及びスポーツ活用力(3項目)の全項目において否定的な回答が多い状況(表3)であったこと、「生きる力」との関連より、下位尺度「調整力」(図4、表8)及び「スポーツ活用力」(図5、表9)と正の関連であったことから、定時制生徒にとってこの2つの力を体得することが厳しい力であると推察する。下位尺度「調整力」は、知識や情報を精査することや、それらを合理的に組み立てるときに要する力であることから、体育授業の学びでは、仲間存在を重んじたり(礼儀、マナー、ルール)、試合に勝つために作戦を立てたり、意見交換をするなど、自分は何をしたらいいかを考えて行動するときに発揮する力である。そして、この力の体得が「友達との助け合い・教え合い」につながると推察する。一方、下位尺度「スポーツ活用力」は、自己の関心や適性に応じた運動・スポーツと関わるために要する力であることから、運動・スポーツをすることが好きな生徒はもちろんのこと、先述した健康上や過去のトラウマ経験等を理由に「するスポーツ」に対して否定的な生徒が、体育授業において「するスポーツ」以外で自分になにができるのかを考えて取り組むために寄与する力であるといえる。したがって、体育授業によりこの2つの力を体得することで「目標意識」「友達との助け合い・教え合い」の向上につながると

推察する。そのためにも、今後の育成に向けて体育授業では、試合の観戦や応援、審判・得点・記録などの役割、準備・後片づけといった生徒の状況や能力に応じて活躍ができる場面の提供や、運動・スポーツを色々な見方や考え方¹²⁾（「する」だけではなく、多様な関わり方ができることを知る）でとらえることができる授業内容の工夫が必要になると考える。

V. 結 論

本研究は、旧学習指導要領で示されていた「生きる力」は、旧学習指導要領の学びを終えた彼らにとって、概ねどのような力を身に付けることができたのか、全日制及び定時制（3年制）の日常生活、運動・スポーツ、体育授業の意識との関連から検討することを目的とした。結果は以下のように要約される。

1. 日常生活意識

全日制は、「生きる力」と学校生活の楽しさに関連がみられなかったことから、学校生活の楽しさの有無が「生きる力」の体得に直接的な関与をすることではないことが示唆された。一方、学校外の生活において下位尺度「調整力」と負の関連がみられた。現時点だけではなく、これからも学校外の生活が楽しく過ごすためにも、学校外での人とのよりよいつながりのために、「調整力」は有効な力であり、自己や他者の情動を理解して適切な対応ができる力として強化していくことが必要である。

定時制は、学校外の生活が「生きる力」全下位尺度と正の関連に、学校生活が全下位尺度と負の関連がみられた。定時制生徒にとって「外部との関わり」は「生きる力」を体得するために重要な要素であるといえる。今後の育成に向けて、地域や企業などの連携により「外部との関わり」ができる工夫が必要である。

2. 運動意識

(1) 運動・スポーツ

全日制は、下位尺度「日常生活行動」全項目において過半数以上が肯定的回答であったことから、基本的な生活習慣が身に付いているように伺えた。そして、この力と運動・スポーツに正の関連がみられたことから、運動・スポーツの意識の高まりは規則正しい生活習慣を身に付けるために必要となる力である「日常生活行動」の体得に寄与することが示唆された。しかし、年次間において3年生が他年次よりもこの力の評価が低かったことから、卒業後、生活習慣の乱れが起こりうる可能性が懸念される。今後の育成に向けて学校現

場では、年次に左右されない運動・スポーツへの関わる機会の環境提供や、生徒らが高校卒業後も運動・スポーツの意識を高めて実践していくための個々に応じた指導や配慮が必要である。

定時制は、「生きる力」の体得に直接的な関与はしていなかった。

(2) 体育授業

全日制は、「生きる力」全下位尺度と正の関連にあった。そして、下位尺度「主体的行動力」以外、全日制の方が定時制より身に付けやすい力であることが示唆された。とくに下位尺度「情況把握力」は年次が上がるにつれて身に付いている状況であった。

定時制は、下位尺度「調整力」及び「スポーツ活用能力」と正の関連があった。下位尺度「調整力」は、自分は何をしたらよいかを考えて行動するときに発揮する力であり、下位尺度「スポーツ活用能力」は、自己の関心や適性に応じた運動・スポーツと関わるために要する力である。今後の育成に向けて、運動・スポーツが好きな生徒はもちろんのこと、健康上や過去のトラウマ経験を理由に、「するスポーツ」ができない生徒のために、体育授業において「するスポーツ」以外で自分になにができるのかを考えて取り組むための授業内容の工夫が必要である。

VI. 今後の課題

今回使用した尺度は、旧学習指導要領踏まえて作成されたものである。旧学習指導要領の学びを終えた生徒たちが身に付くことができた（できなかった）「生きる力」を把握し、今後の育成に向けての課題をみいだすことができた。しかし、その力や課題が全て現行学習指導要領で求める力や課題となるかは不明である。そのため、今後、生きる力の育成について研究を続けていくためにも、現行の学習指導要領が新たに求める生きる力の具体的内容を精査して尺度開発や実践研究を試みる必要がある。

謝辞：本研究を進めるにあたり、調査にご協力くださいました公立高等学校全日制課程4校及び定時制課程3校の生徒及び教職員の皆様、研究協力者の先生方に心より感謝申し上げます。

付記：本研究は、令和5年度上廣倫理財団研究助成を受けたものの一部である。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省: キャリア教育とは何か.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1306818_04.pdf, 2011.
- 2) 中央教育審議会: 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970606.htm, 1996.
- 3) 浅川潔司, 森井洋子, 古川雅文, 上地安昭: 高校生の学校生活適応感に関する研究, 兵庫教育大学研究紀要, Vol.22, pp.32-40, 2002.
- 4) 下坂剛: 青年期の各学校段階における無気力感の検討
教育心理学研究, Vol.49, No.3, pp.305-313, 2001.
- 5) 石田靖彦: 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性 - 他方法
相関行列からの検討—, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, No.12, pp.287-292, 2009.
- 6) 林園子: 定時制高校における「生きる力」の育成の検討—「生きる力」尺度作成と自己認識・日常生活充実感の関連から—, 思春期学 Vol.38, No.2, pp.210-233, 2020.
- 7) 林園子: 高校生の体育授業と運動・スポーツの意識に関する研究, 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要, Vol.31, pp.57-65, 2013.
- 8) 中須賀巧, 阪田俊輔, 杉山佳生: 体育学習における動機づけ雰囲気, 目標志向性, 生きる力の因果関係の推定, 体育学研究, Vol.63, pp.623-639, 2018.
- 9) 林園子: 「生きる力」を養う体育授業におけるあり方の検討—一定時制課程の女子生徒に着眼して—, 日本女子体育連盟学術研究, Vol.33, pp.29-42, 2017.
- 10) 文部科学省: 資料 11 「生きる力」と資質・能力について (平成 20 年中央教育審議会答申抜粋).
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm, 2008.
- 11) 文部科学省: 平成 20.21 年改訂学習指導要領解説等, 学習指導要領「生きる力」高等学校学習指導要領改訂のポイント.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/1304385.htm, 2008.
- 12) 文部科学省: 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会.
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf, 2014.
- 13) 内閣府男女共同参画局: ジェンダー統計の観点からの性別欄の基本的な考え方について.
https://www.soumu.go.jp/main_content/000835648.pdf, 2022.
- 14) スポーツ庁: 令和 5 (2023) 年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査.
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/toukei/kodomo/zencyo/1411922_00007.html, 2023.
- 15) NHK 放送文化研究所: 中学生・高校生の生活と意識調査 2022.
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20221216_1.pdf, 2022.
- 16) 大久保智生: 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度との作成と学年別の検討, 教育心理学研究, Vol.53, No.3, pp.307-319, 2005.
- 17) 徳永豊: 子どもの「社会的能力」と「情動調整力」を高める指導—「生きる力」の一つの軸として—, 福岡大学研究部論集, Vol.35, pp.15-21, 2012.
- 18) こども家庭庁: 令和 5 年度「青少年のインターネット利用環境実態調査」報告書.
https://www.cfa.go.jp/policies/youthkankyout/internet_research/results-etc/r05, 2023.
- 19) 中山満子: 高校生の友人関係と SNS 利用に伴うネガティブ経験, 科学・技術研究, Vol.7, No.2, pp.127-132, 2018.
- 20) 国立青少年教育機構: 高校生の心と体の健康に関する意識調査報告.
<https://koueki.net/user/niye/110349438-1.pdf>, 2018.
- 21) 笹川スポーツ財団: 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2023.
https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/datalist/2023/index.html, 2023.
- 22) 安藤達彦, 穂坂賢, 新井佐斗恵, 吉田宗弘: 大学生と高校生における健康意識と食行動の比較, 日健医誌, Vol.9, No.1, pp.60-66, 2000.
- 23) 朴寅成, 徳山薫平, 佐藤誠: 運動の快眠促進効果の解明: 運動と睡眠の質をつなぐ新たな解析指標, デサントスポーツ科学, Vol. 42, pp.183-194, 2022.
- 24) 橋本公雄, 徳永幹雄: 運動参加タイプとその特性—健康関連要因に基づく分析—, 健康科学, Vol.24, pp.47-55, 2002.
- 25) 澤聡美: 楽しい体育授業の満足度に影響する要因, 人

間発達科学部紀要, Vol.11, No.3, pp.31-37, 2017.

- 26) 城所章子, 酒井朗: 夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究—「編成資源」を手がかりに—, 教育社会学研究, Vol.78, pp.213-233, 2006.

- 27) 藤原和政, 河村茂雄: 高校生におけるソーシャルスキルと学校生活満足度との関連—学校の特性の視点から—, カウンセリング研究, Vol.51, No.3, pp.157-167, 2019.

- 28) 公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会: 平成 23 年度文部科学省委託事業「高等学校定時制課程・通信制課程のあり方に関する調査研究」.

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afildfile/2012/05/29/1321486_01.pdf, 2011.

(2025 年 2 月 14 日 受理)